

---

# オープンドシール

鳴鐘新都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オープンドシール

### 【Zコード】

Z5764Z

### 【作者名】

鳴鐘新都

### 【あらすじ】

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創つたとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に

居座り続けていた……

そんな御伽噺のような伝承の残る異世界・パラダイムがあることなど知らず

現代の日本から落ちてきた熱血高校生桜田雪平の人生は一変する。彼を待つのは戦いと旅の日々、そして仲間との出会い。

雪平は銀髪紫眼の美形青年剣士、ヴァイスに出会い、故郷への帰還への鍵が

この世界の英雄三人が嘗て解放した残り7つの大冷孔に有ると知る。雪平はヴァイスに同行、師事を仰いで魔物と怪物を狩り

冷穴を解放する職バスターになる事を決意する。

頼るべきはチートなどではなく己の心、鋼の魂の冒険活劇。彼の故郷はまだ遠い。

## プロローグ（前書き）

異世界トリップものです。  
暇つぶしきりいの軽い気持ちで読んでいただけないと幸いです。

## プロローグ

「……いてえ」

学校の帰りに突然目の前が真っ暗になつたかと思つと  
次の瞬間には背中に物凄い衝撃が走つた。

あたりは妙につんとする黒と木の匂いが鼻を衝く。

「おい、お前大丈夫か？」

声をかけられた。よく通る男の声だ。

声の主を探すとそこには妙な男が居た。

年のころは二十代だろうか？

顔立ちその物は美形。だが格好と眼と髪が奇妙だ。

長めの銀髪に紫の眼。それになにかのRPGや漫画の登場人物のような

黒の鎧に腰に帯びた剣。

「くつそ……これが大丈夫に見えるかよ……」

「立てるか？手を貸すぞ」

謎のコスプレ野郎に腕を貸されて立ち上がる。

「ありがとう、助かつたぜ！……でも一体全体何がどうなつて……」  
体中に木片やコケやら何やらがついているのに気づき叩き落とす。

「どうやらお前はあそこから落ちてきたようだぞ」

落ち着き払つた態度の男の指差す方向を眺めると  
なんと言うか余り受け入れたくない光景が見えた。

俺の住んでいた日本の街の何処かなどいう可能性は今この瞬間消え  
うせた。

青い空、茂る森の木々の中に立つてるのは俺が背中から落ちたら  
しき建物。

打ち捨てられた礼拝堂や教会のような感じで、屋根の一部が凹んで  
いる。

……明らかに俺の落下の痕跡だろう。

「……マジか……冗談きついぜ……ここ何処だよ……」

背中から落ちた落下的傷の痛みすら忘れるほどシャックだ。

これがいわゆる神隠しだやつなのか……

男らしくないが俺は頭を抱えて情けなく呻く」としか出来なかつた。

「……お前運が良いな」

突き放したような響きのあるよく通る声で謎のコスプレ野郎が呟いたので切れそうになつた。

「どこがだよ！」

「お前を見つけたのが俺じゃなく野盗や怪物の類ならお前は死んでる」

こいつの冷徹とも言える斬つて捨てるような言動

事実と現実だけを直視した言い方に俺は確かに真実の匂いを感じて背筋が寒くなつた。

「……いるの？野盗とか怪物とか聞き捨てならない言葉がきこえたんすけど」

コスプレ剣士は何言つてるんだこの阿呆は、とこいつのような態度で髪をかき上げながら答えた。

「……居るに決まつているだろ？お前は何処の平和な国から來たんだ？」

ああ……いつまでもお前では具合が悪いな。名前は？

「桜田雪平。あなたの名前は？」

「耳慣れぬ響きだな。俺はヴァイス」

端的にそう言つたコスプレ野郎……いや、もうコスプレ野郎と思つのはよそう。

一応落ち着いてヴァイスを観察する余裕が出てきた。  
鎧についた細かい傷に小さな汚れ。身に帯びた剣や鎧はどう見ても使い込まれている。

コスプレじゃなく実用品として使わなければこうはならないだろ？それに身のこなしもそうだ。何かの武術をやつていいよと思える。俺も少しだけ心得があるからなおさら良く分かる。

ドックリでもコスプレでもなくひつねりは本当に訳の分からぬ異世界らしい。

「……行く当ても無い、金もねえ、帰れるかどうかもわからねえ。何でこうなった。俺の未来も明日も全く見えねえ」

打ちひしがれて地面に手をつきがっくりと氣落ちする俺にヴァイスが深いため息をついた後声をかける。

「……見捨てるのは簡単だが、それは余りにも安易すぎだな。このままでは確実に野垂れ死ぬな、それも面白くない。雪平、なんとかしてやるからついてここ」

やべえ、この人かっけえ……

人情が身にしみる……涙出できそうだ……

コスプレ野郎なんて思つてすいませんでした。

「すいませんよろしくお願ひしますヴァイスさん!」

「ヴァイスでいい。さんは要らん。

ああ、生活が安定してきたらちゃんと掛かった費用は請求するからな

しつかりしてくるなあ……

いや、それでも十分ありがたいけど。

## プロローグ（後書き）

チート無し、転生無し。

これでも異世界トリップ難易度・ドM 難易度・ルナティックには遠い。

主人公には「有情」だと思っていただきたい。

チートも無い。転生による強くてニユーゲームもない。言葉も通じない、誰かが助けにも現れないのが真のリアル異世界トリップだ。

## 第一話・郷愁、そして示された目的

俺がこの謎のファンタジーな世界に流れ着いてもう何キロ歩いただろつか？

正確なところは少しもわからない。

整地されていない森を歩くことなど初めての経験で何度も足をとられて躊躇、木々から生える小枝に引っかかれ足元に生える草の棘に皮膚を刺された。体は鍛えているつもりだったが慣れない事が重なりすぎて足は疲労でガクガクだ。

ああ、ベッドで眠りたい……

夕方になつた頃森を抜けて少し開けた丘のところ、ヴァイスが口を開いた。

「近くに水場もある。今日は此処で野営するぞ」

「ういーす……」

ヴァイスは俺に小さなナイフを差し出していつも命じた。

「このあたりの草を刈つて寝る場所を作るんだ。

小さな石とかも取り除く

それからヴァイスと俺は一人で草を刈つて石を取り除く作業に没頭した。

なんとかその作業を終えて座り込んでいると

ヴァイスは荷物から文字が刻まれた杭のようなものを取り出し地面に幾つも打ち込んでいく。ちょうどいましがた作った空き地を囲うようにだ。

「なんすかそれ？」

「虫除けと獣避け、警戒の式が刻まれた結界を作ってるんだ」

端的にヴァイスはそう説明した。

「……そっすか」

やつぱり魔法もあるんだ。

原理を尋ねたり効力に懷疑を示す余裕は今の俺には無い  
まったく……ファンタジー過ぎて困るぜ……

それから一人で設営を完了させ

ヴァイスの煎てくれたむやみやたらと苦いお茶のようなものを飲んで

体を温めながら火を囲むことでようやく俺は人心地つけた。

「あ、帰りてえなあ……」

我ながら情けないと思いつつしみじみと俺は呟いた。

単調で機械的な学園生活の中で馬鹿なことをする。

日本で高校生をやつてた時はこれほどつまらないものは無いと  
思っていたのだったが、いざ全く取つ掛かりの無い世界に放り出され

て初めてありがたみが身にしみた。

平和も退屈も結構なことじやないか。

コンクリートで海も川も大地も固められて鉛色の陰鬱な空  
薄汚れていても、やはり故郷は故郷で楽しい事や美しいことも確かに  
にあそこには有つたのだ。

だが今俺の眼に映るのは自然で一杯のクソッタレファンタジーの夜  
の闇ばかり。

文明の光などありはしない。

しかも怪物や追いはぎなどという現実味の無いものが跋扈する危険  
な闇だ。

「帰りたい、か。そうだな……故郷はいいものだ  
それがどんな厳しい所であるうとも……」

ヴァイスから意外な一言が聞けた。

自分でも正直情けない事を言つたと思う  
てつくり何か斬つて捨てるようなことを言われると思つたのに予想  
外だ。

「意外だな……俺、てつきり甘えるなみたいなことを言われるかと  
思つた」

「お前は迷つて此処にきたのだろう？誰だつて心細いはずだ。  
それに俺だつて故郷に帰る事を目指しているんだ。

七つの【大冷孔】を解放し、遙か遠い故郷に帰る

物憂げにヴァイスはそう呟いた。

悔しいがいやしかし絵になるなこの男イケメンすぎるだろ。  
ちょっと現実離れした美形だ。

その物憂げな表情だけで女の子が放つて置かないだろ。  
向こうの世界ならそのままアイドルや俳優でもやつていけるだろ  
なと思う。

それはそうと俺は思つた疑問を口にする。

「大冷孔ってなんだ？」

ヴァイスが本当に驚いたような表情を形作る

「本当に知らないのか……？お前は何処から来たんだ？」

「日本だよ！にっぽん！ああ、こっちじや通じないかも知れないな

えーと、チキュウの日本！テラ！アース！ガイア！」

俺は思いつくがままにそれっぽい世界の名称を並べ立ててみた。

「……本気で言つてはいるのか？」

ヴァイスはいぶかしげに眉をひそめた。

「え、なんか俺おかしい事言つた？」

「地球も日本とやらも知らんがまさかガイアとは……」

「え。知つてるの！？」

「ガイアは彼岸、あの世だ。天上有る死後の世界……魂の行く場  
所とされている」

「あの世……マジかよ……こっちの世界……あの世……

一体全体……此処はどうなつてるんだ……」

「信じないわけではないが何処から来たかは吹いて回らないほう  
がお前のためだ」

「分かつたよヴァイス……頭のやばい奴扱いされたくないもんな」

「聞かれたら記憶喪失とでもしておけ」

「おう……で、大冷孔って何なんだ？」

「それを説明するにはこの世界の神話から始めなければならないな」

そういうてヴァイスは語り始めた。

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創つたとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に居座り続けていた……

「へー。なんか、聞いたことのあるよつた無いよつたな空の星たちの支配権？何か引っかかるんだよなあ。

似たような話をどつかで聞いたよつたな……

「小さな規模の冷孔は山ほどあって、その傍に村があつたりするな。地上にはびこる怪物退治や冷孔に居座る大物の怪物を退治する職業

【バスター】は今も引く手数多だな

功績によっては栄達、栄耀の道が開けるし貴族になれることがある」「なんとなーくニコアンスで冷孔がこの世界で重要視されてるのは分かつたけど何故なんだ？」

そして何で怪物が居座つてるのは分かつたけど何してるんだ?どうして怪物をどけなきやならない?」

「あー。そこも説明しないといけないか……いいか?

冷孔を開放する利点の方から説明するとだな……

第一に冷孔の開いているところと閉じている所では土地の実りの豊かさが全く違うんだ。

それに冷孔から出た魔力だけじゃなく冷気は食料の保存に使える。

第二に魔法で出来ることが増えるんだ、冷孔のバックアップ有りと無しじやその強さは比較にならなくなる。

煮炊きする火。安全な水も魔法で出せる。魔法で作られる様々な便利な魔道具も作れる……

何より大きいのは魔物、怪物避けの結界を冷孔の魔力で展開できることだ。

冷孔の開いていない土地でも魔法は使えるが生命力精神力を直に削ることになる

「あー。なるほどなあ……食い物と技術と防衛か……大事だよな」子供でも知つてることなんだがなあ、とヴァイスが肩をすくめ付け加えたのがちょっと辛い

ほんとに、迷い込んできただけの一般ピープル、健康優良日本男児なんだよおれは。

「他にも魔物をどけなきやならない理由はな

悪神、邪神の使いとされている魔物や怪物は基本的に人を殺し、喰う

「うわあ……」

「冷孔に居座る大物は魔力を吸つて生きるからその場から殆ど動かないが……」

「その大物の怪物に魔力を食われてその冷孔は使い物にならない、と」

「その通り。冷孔に居座つてる大物は地上をうろつく怪物や魔物とは比較にならんくらい強い。

保有している魔力の桁が違うからな、肉体も強化されてるし中には強力な魔法を使う知能の高い奴もいる」

「なるほど、じゃ、大冷孔つてのはそれの凄い奴か

「ああ、現在見つかつての大冷孔は全部で十、その内解放済みは三

つ……

現在、世界最大の三つの都、帝都、王都、神都になつてゐる

「なんか凄いんだな」

「一個でも解放すれば最大級の名声と富が得られるだろうな。歴史上、英雄と勇者と初代教皇以外、大冷孔の解放には成功していない……」

さつき、一般的な神話に対しては話しただろ?」

「善き神様が、とかつてやつだろ?」

「冷孔の解放は民を富ませ怪物の脅威から人を護るだけではなく神意にも沿うと

一般的には考えられている。冷孔を解放すればするほど悪しき神の力は弱まり善き神が強くなる……

つまりは宗教上の権威も非常に大きいんだ」

「なんか色々ともめそうだなあ」

「そう、もめる。具体的には冷孔を開放する命知らずは常に歓迎されるが開いた後の利権がなあ……」

「まためんどくさい話だなあ……細かいことはあんまり考えたくないぜ。」

とりあえず冷孔を開放すれば皆にとつて良いんだろ?」

「民は富むな。それがきちつと分配されるかどうかは別問題だが」「だつたらそれでいいんじゃねーの?」

「……それにな、もし雪平が本当に帰りたいいや、生身のままガイアに行きたいのなら……大冷孔を開くことでしか可能性はないと思う」

「どういうことだ!?」

「大冷孔の魔力を利用してガイアまでの空間を繋げる魔法を使つんだ。」

冷孔の魔力を利用して長距離転移をする術式は存在するがガイアまでとなるとまるで未知の領域、雲を掴むよつた話だ

「未知だらうが何だらうが可能性があるならとにかくやるつきやね——よなあ……」

「そういう結論になるのか?」

「はい?」

なにいつてんだ。その結論しかないだろ。

「俺が送つてやるから危険を冒さず街で暮らすといつ手もある」

「やだよ。チャレンジしないうちに諦めて安易な道に走るのなんて俺の世界そんな奴らばっかりだぜ。そんなの俺はもうごめんだ。

危険は嫌だけど、どうせ命は軽いんだ。

「やつても居ないのに逃げるのは死ぬより嫌だ」

拳を握り締め自分に言い聞かせるように俺は呟えた。

全てじやねーだろ！

男の生きる道に本当に必要で頼れるのは

己の燃え滾る鋼の魂！元の世界じゃ理解も賛同もされないし

古臭く鏑ひちまつたが……俺はこういう生き様が好きなんだよ！」

俺は俺の生き方が元の生

で先時代遅れだらうが何だらうが俺は好きなものは好きといひ。

それが本当の個性ってやつなんじやねえの？

「……………」

！！痛快で傑作だ！！

俺みたいな大馬鹿が他にも居たとはなー！」

俺にはヴァイスが馬鹿には見えないぜ。少なくとも俺より賢そう

「二号」も暫平、俺の盟約である七〇の大令乳の解放はんて世間的だ」

な価値観に照らし合わせれば、いざいざ雪立たせの風伯の

十分大馬鹿の戯言、鼻で笑われる子供の夢想のようなものなんだよ。

一つで英雄や勇者に成れる大事なんだ。七つ全部は……」

「うおカッ！」と叫ぶ。左の闇がなんとかぬがせぬつむぎだ。

やつて故郷に帰るんだろう？

「無論だ」

「じゃあそれでいいじゃねーか」

「……片や、七つの大冷孔を開放すると決めた大馬鹿と  
片やガイアを目指すと誓った大馬鹿か……子供の空想だが悪くない。  
悪くないぞ

じゃあ、まずは雪平には怪物と魔物を狩り冷孔を開放する【バスタ  
ー】になつてもらわなきやな！」

## 第一話・郷愁、そして示された目的（後書き）

主人公、熱血馬鹿。

そして世界観の説明を少しあせていただきました。

夜明け近く、まだ眠い眼を擦りながら  
ガツチガチに石の様に固く、黒ずんだパンと  
塩気のきつ過ぎる干し肉の朝食を俺は齧った。  
分けてもらつて悪いとは思いつつ俺は切り出した。  
「なあ、飯つて何時もこんな感じなのか？」  
ヴァイスは少し顔を顰めながらこう答えた。

「……俺は料理は出来んのだ。

自分でやつてみたことも有るが古びた匂う革靴みたいなことになつた  
明けても暮れても戦いばかりやつてたからな……  
それに旅の間の保存食は何処へ行つてもこんな感じだ  
それでも食えるだけマシといった所だな。

「食料自体がこの世界じゃ貴重なんだ」  
ヴァイスさんは出来そうなイメージがあつたけどなあ。

冷静沈着で銀髪紫眼の一枚目イケメン剣士つてだけの先入観で  
判断するのはやつぱりよくないな。

うつむ、それにしたつてこれは酷い。

やつぱり日本とファンタジー世界じゃ違つんだな……

国によつて大分食文化や料理の腕前は違うつて聞いたことあるナゾ。

日本の食事つて美味かつたんだな。

よし、決めた。

現状に不満を言つるのは誰だつて出来る。

安易な道に流されるのは嫌だ。

自分から建設的な事を始めなければ何一つ変わらない。

「なるほどなあ……一回でいいから今度作るときは俺に任せて貰つ  
てもいいですか？」

「心得があるのか？」

ヴァイスが少しだけ嬉しそうな顔と声色をした。

本当に微かな変化だが。

分かりにくい人だが、信頼には値すると思つ。

「多少なら」

「……今、お前を拾つて初めて良かつたと思つたぞ」やつぱり、ちよつとは厄介者と思われてたんだな。何時までもこの立場に甘んじているわけには行かない。速い所、なんとかしないといけないな。

食事の後、朝日に照らされながら俺たちは出発した。道中、絶えずヴァイスが周囲に怪しい影が無いか気を配つてゐる事が良く分かつた。

怪物や追いはぎに不意打ちされるのは俺だつてごめんだ。

こういうところはヴァイスは旅慣れているらしく本当に頼りになる。「タジンの町が見えてきたぞ」

いくつか丘を越えたところで街が見えてきた。

高さは大体三メートルくらいのレンガの壁に囲まれてゐる。

「行くぞ」

「ういーす」

門のところでは草木染と思しき赤や緑のチュニックのような衣服を纏つた商人らしき人が馬車を門の中に入れていた。周囲には皮鎧や金属製の鎧を纏つた護衛や傭兵らしき人たちの姿も見える。

順番を待つて門の前にたどり着くと門番らしき人に呼び止められる。

「そこで止まれ。身分を証明するようなものは持つてゐるか?」ヴァイスは黙つて荷物から銀色のプレートらしきものを差し出す。「バスターか……何時も」苦労さんだな

門番らしきおつさんは俺のほうをジロジロ見てゐる。

「見慣れない格好だな……」

「そつちは俺の連れだ。バスター見習いをやらせよつと思つてゐる」

「ふむ……」

いぶかしげな目線を送る門番のおっさんに、ヴァイスが何かを握らせた。

「いつも大変だな。これで酒でも飲んで体を温めるといい」

途端に門番の顔が疑惑から喜びに塗り換わる。

「おう、こいつはすまねえな。へへ……話の分かる奴は嫌いじゃないぜ

いぜ

おい、もう行つていいぞ。そっちの餓鬼も死なないよつ頑張る」

たな」

門番のおっさんは掌に握つた銀貨に集中して俺たちをもつ見ていい。

やつと俺たちは町の中に入れた。

「マジ助かつたよヴァイス……俺はこっちの身分なんか有りはしないからなあー」

「忘れていいぞ。金で解決できる面倒もあるとこつことだ。

……その服は目立つし余り戦いには向いていないな

「変に注目を浴びるのもやだしな

また頼りっぱなしにな……ほんと悪いい……

ヴァイスに申し訳ないし

なにも何も出来ない自分がちょっとみじめだった。

「忘れていい。初期投資は仕方が無い。

お前にとつて幸いなことに俺は賭けもやらんし

女を買つたり酒や煙草もやらんから蓄えは少々有る

ほんと禁欲的というかストイックな人だな……

「マジでありがとつござりますアニキ……」

自然とそんな言葉が口をついて出た。

なんだろう、なんだかそんな感じがするんだ。

自分に兄弟や兄が居たらこう呼んでいたと思つ。

「アニキ、か……」

ヴァイスはなにやら考え込んでいたようだったが

直ぐに軽く頭をふつて俺にこう告げた。

「まあいい、宿を取つたら服と鎧、それに武器も見繕わなくてはならん。

「他にもやる」と覚へるゝはこゝりでもある、ぐずぐずするな

「せつて、

ぐだぐだと勧めるのは後でも出来る。

いまはやるべき事をやるだけだ。

## 第一話・最初の街（後書き）

バスターになる為に最初の一歩を踏み出した主人公。  
いまだにヒロイン未登場。女っ気が無いなあ。  
本格的に魔法を習得するのは何時になることやら……

## 第三話・敗北、打ち碎かれた偽りの自信と再起

「どうこうことだよ！ふざけんな！幾らあんたでも言つてこないことと悪いことがあるぞ！」

俺はヴァイスに食つて掛かつていた。

武器を選ぶ前に、武術の経験の有無を聞かれて剣道を今をやつている事を言つたのだが

街の空き地で木の枝を使つて実際に一通りの型を見せた所で言われた

ヴァイスの一言が余りにも許せなかつた。

「……貴族の遊びの剣だな」

奴は冷たくそつけなく興味なさげにそつ言いやがつたのだ。

流石にこれは力チンと来る。

俺は遊びで剣道をやつていたわけじゃない。

自慢じやないが同年代の学校の剣道部の中では敵は居なかつた。先輩のキツイじきにも耐え自主練習も欠かさずにやつてきたとい

うのに……

それを遊び？日本の剣術や剣道への侮辱。

それは俺のやつてきた努力への侮辱だ。

「……面倒だ。俺に一撃当たられたら今の事は取り消してやる」

ヴァイスが剣の鞘を手に持ちかえてなそつ言つた。

「ああいいぜ！あんたかどんだけ強いかしらねえけど吠え面かくなよー」

「……掛かつてこないのか？」

ヴァイスの声はあくまで冷淡だつた。

「上等だ行くぞこの野郎！」

自らを奮い立たせるように

思いつきり突きを繰り出して……

しまつた、と少し思つた

突き技は本来は強力な殺人技。

竹刀でも突きの入り方や角度しだいでは防具を通りこして生身の喉や首に掠めことがある。

危険度が高いため中学までは禁止されている。

（あれだけ大口を叩いたんだ、なんとか出来なくとも文句は……）

あっけないほどにあっさりと

ガツ、と軽く先端を往なされた手ごたえが手に握る木の枝から伝わった。

やべっ、強い。

さつきの一撃に微妙に迷いが入ったのが自分でも分かつた。ヴァイスの目には全く同様が見られない

とはいえ余裕で受け流せる時点でかなりの

そこまで一瞬で考え、即座にヴァイスの打ち込みが来た。

速つ、受けろ俺 間に合え……っ！

「おっ、うっ……」

脇腹から全身に駆け抜ける激痛。

受けたはずなのにガードごと叩き込まれた。

こんなに重い剣今まで受けたことがねえ……

「分かつたか？お前の剣が遊びだということが

実戦だつたら今ので死んでいる……

雪平、お前の剣は軽いんだよ

「軽い……俺の剣が……軽い……？」

「打ちのめされても握った獲物を手放さない根性だけは立派だが余りにも未熟すぎる」

ショックで目の前がゆがむ。

当たり前だ。打ち合いで剣を いま握っているのは木の棒だが

竹刀を取り落とそうものならどんなキツイ事を言われるか分かつたもんじやない。

少なくとも俺のもといた道場じゃそうだった。

「余りにもお粗末だつたぞ。対峙した時点で俺の力量はうすうす分かつたんじやないか？

躊躇つたお前が未熟なんだ」

ヴァイスの言うことはいちいちもつともだ。

なんとなくだが、対峙した時点で相手の気迫、身のこなしで相手の強さを察せられない奴は強くない。

それで油断した俺の未熟と迂闊さが恨めしい。

「察するに剣術それ自体の完成度は低くない

剣術自体への発言だけは訂正してやる

剣さばきと足の運びを見ていたが……

最小の動きで人を殺すのに洗練された剣、だ

だが使い手がこれではな……

そうだ、その通りだ。

日本の剣術や剣道自体がダメなわけが無い

ダメなのは、俺だった。

「俺……そんなにダメだったのかよ」

「未熟だつたな……お前の為にはつきり言つておくが……

バスターとして生き残りたいなら今までの剣術の常識は捨てた方がお前のためだ」

「……どういうことつすか?」

「お前のやつて来た剣は人間相手の剣で怪物相手の物ではないからだ

お前の軽い剣では怪物の分厚い肉皮、或いは甲羅や鱗に歯が立たん

確かに……

日本の剣道はあくまで「人」相手のものだ。

そんなことを想定していない。

「それにな、お前剣で生き物を殺したことが無いだろつ。生きるか死ぬかの気迫がまるで無い。

お前のは壁の中で貴族が剣といつそれにそつくりだ。

安全圏の練習で幾ら強くてもそれは貴族の遊びに過ぎない

悔しいけどこれも全くその通りだと思う。

死自体が今の日本では遠い。

昔の人はこれが練習や稽古がずっと続けばいいのに、と思つていた

といつ

話を昔道場の先生から聞いたことがある。

昔で練習や稽古でキツイ疲れたと手を抜けば本番で死ぬのに決まつている。

鍛錬不足＝死の時代ではないから

今思い返してみれば同年代の友達は

練習キツイとか防具が匂うとかへタレたことを言つ。

考へても見れば俺はガチで命の掛かつた世界など知らなかつた……

「悔しい……」

心が軋みを上げる。

しんどいのにも痛いのにも臭いのにも熱いのにも寒いのにも耐えて練習してきたのに……

負けたのも、自分が未熟なのにも。

負けた悔しくない？そんな奴が居たら俺は蹴つ飛ばしてやりたくない。

負けたのに悔しくない、そんなのは何一つ一生懸命頑張つたり真剣にやつたこと無いやつだけが吐くセリフだ。

男が吐いていいセリフじゃねえ。

「人と比べて得た自信など偽りだ。

お前を待つ戦いはこんなものではないぞ。

怪物は情けも容赦も持たず殺しに来る。

覚悟と鍛錬をもつてしても容易く人は死ぬのだ。  
ならばどうする？

此処で止めるか？今ならまだ戦いの道に踏み込まず暮らしていくれるぞ？」

人と比べて得た自信がいかに偽りかは今、俺は知らされた。

怪物は容赦なく殺しにくるのも本当なのだろう。

「冗談じゃねえ！！」

歯を食いしばり俺は心の底から叫んでいた。

「生きてりや負けることもそりやあるだらうさ……」

頑張つたって負けることもあるだらうぞ、だがな！！

ここで逃げたら、生きることに妥協したら俺は一重に惨めじゃねーか！！

負けたまま逃げるのだけは嫌だ！！

本当に思い描いたことを捨てて、自分に負けたことを抱えて生きるのはきっと恐ろしく惨めなのだろう。

誇りを捨てても生きていける？

現実を思い知るのが大事？そんなのクソくらえ、だ。

必ず死ぬのなら、絶対に嫌だという事は魂の芯。

それを折られたまま生きれるほど俺は器用でも賢くも無い！！

「……それだけ吠えるのなら、お前はきっといいバスターになれる。

時間を食つたな。だがお前の慢心を打ち碎けたから結果的には良かつたのだろう」「

「ヴァイスのアーキッ！」

いぶかしげにヴァイスがこちらを見た。

「ありがとうございました！！」

俺は心の底から頭を下げて、こう言つていた。

この慢心を抱えたまま戦つていたら俺はきっと最初の戦いで死んでいた。

自分の都合の良い事を言つてくれたりやつてくれたりするのが本当に良い人だとは限らない。

こういうとき、形式的でポーズではない

何故対戦相手に礼をするかの意味を本当の意味で体得した気がする。

「……ついて来い雪平、お前に似合いの武器を選んでやる」

ヴァイスは僅かに温かみのある苦笑を浮かべながら、そう言つた。何だかんだあるけど、やっぱリアーキはいい人だと思つ。

「よろしくおねがいしますっ！！」

## 第四話・似合ひの武器

俺はヴァイスに連れられて町の武器屋に入った。

「本当は各種武器の専門店でオーダーメイドしてもうのが一番いいが……」

「買って貰えるだけで十分にありがたいよ」

店内に入ると様々な武器が置いてある。

そのどれもが一般的にイメージする武器より大きく、重そうだ。持ち上げられるか疑問に思うほど大きなハンマーや両手剣。長物は長い柄の先端に斧の付いたポールアックスや大薙刀に似た武器。

少しでも俺の今までやつて来たことに近いのを探そうと

見つけた常識的なサイズの剣もなんだか違う。

まるで剣というよりは非常に頑丈そうな「ついひし形の針や杭……」ヴァイスの使っている武器にちょっと似ている。

「人相手ならここまでの一いつさも頑丈さも重さもいらねえな……切れ味なんか一の次三の次……」

折れないこと曲がらないことを大事にして

体重と加重を利用して相手に突き入れる武器だわこりや

本当に人相手を想定していないことがはつきり伺える。

「お前はそれは止めておいた方がいい」

ヴァイスに言われちよつと傷つく。

「……お前が使うべきなのはこいつだな」

そうヴァイスが指を刺したのは馬鹿げたサイズの片刃の大剣だった。

先ず最初に頭をよぎったフレーズは斬馬刀。

本当にアニメかゲームに出てくるような武器だ。

剣の幅も厚みも尋常じゃない。

長さは一メートル強くらいか?

剣の横幅は思い切り広げた親指と人差し指の幅くらい。

厚みは一センチ近い金属の塊……

「……こんなん振り回したら直ぐ筋も手首も何もかも逝きそうだな」

脱臼や筋の断裂の故障の恐怖が頭をよぎる。

スポーツをやつている人なら理解できると思うが

体に付いた怪我の故障は癖になる。

ヴァイスが呆れたように呟く。

「……何の為に教会や治癒の魔法が有ると思つてるんだ

「はい？」

多分俺は間抜けな顔をしていたんだと思う。

「ちょ、ちょちょっとまで、直るのかよー？」

体の奥に付いた傷や筋の断裂つて後引くし基本的に完全にはなあらねえんだぞ！？」

「何処の常識かは知らないがそれは捨てた方がいいな。

病とか手足を怪物に喰われたり腐つてしまつた場合ならともかく治癒の魔法や靈薬を使えば怪我なら繋がつてはいる限り大体直る。前より強靭になるくらいだ

「直んの？完全に？」

「怪物との戦いで千切れた手足を繋げてる所くらいみたこともある。

復調しなかつたという話は聞かない。

戦いで死んだという話なら飽きるほど聞くが「

流石はファンタジーだぜ……

元の世界に帰つたらスポーツ医学とか医者関連がひっくり返るな……でも故障を気にせず訓練やトレーニングが出来るなんて……

格闘家やスポーツ選手の夢が此処に有るなあ。

「そんなことより、その剣を持ってみろ」

「……こうか？」

腰に力を入れて剣を持ち上げようと踏ん張る。

何とか持ち上げることはギリギリできた。

ぐつ……想像していた以上に遙かに重てえ……

一度筋トレのときにバーベルの重りを抜いた鉄の棒を持ったときよ

りも重い……

重量何キロあるんだよこれ……

確か竹刀の重さの最低は480グラムでそれ以下だと

試合の時の計量で弾かれたから……

しかしその竹刀でも長いこと振つてると重たく感じるんだぞ……

手がフルフルする、手首がイカレそうだ……

「ふむ……」

「はあ……はあ……剣つてか……」

同じ重さでも握りのフィット感や剣先か鍔元かどっちかに重芯があるかで

大分重さの感じ方が変わるよな

「ああ、それはあるな……自分の手に馴染むかどうかは重要だ。

だがそれは自分の剣をオーダーメードして貰う時の楽しみに取つておけ。

先ずはその剣に慣れる事から始めないとな

「振り回されてるようじやお話にならないもんな……

「そうだ、振り回されるんじやない、振り回すんだ。先ずはそこからだな。

だがその剣はお前に似合いだ」

言われて見ればなんとなくこのクソ重たい剣は他人の気がしない。

「とにかく豪快かつ大胆に、細かいことを考えず力の限り振り回し、その重さで叩き斬れ。

細かなテクニックや立ち回りは追々覚えていけば良い。

その剣ならば分厚い筋肉や硬い鱗や皮、甲羅を持つ怪物も当たれば只では済まん。

自在に使えるよになつたとき初めてその重みが頼れる相棒となる

「やつてやるや、一日も早くくな」

「分かつているとは思うが十分扱いには気をつけろよ。

まかり間違つて落としたり人に当たつたりしたら大事になる。

坦いで持つて歩くだけで十分修行になる

確かにその通りだ。間違いなく体力が付くだろう。

「 気を張つてなきやな……

「 肩に担ぐで背負う為のベルトも要るな。

次はそれに合わせた鎧もいる。

こつちは時間を掛けて選ぶぞ。命に直結することだからな」

次は防具屋か……バスターへの道は遠そうだが弱音は言ってられねえな。

## 第五話・防具選び、最初は魔法禁止令

俺とヴァイスは武器屋での支払いを終えて防具を選ぶ店に向かっていた。

武器の支払いの時にヴァイスがバスターカードを見せていたのが気になつたので質問してみた。

「そういえば武器屋の支払いのときにバスターのカードを見せていたのつてなんだ？」

「ああ、あれか。バスターカードは商店や宿で提示すると割引が利くんだ」

「へー。便利だな」

「命がけで怪物と戦うバスターへの支援策の一つなんだ。

ただしバスターの資格だけ取つて割引サービスだけ受けようなんて馬鹿が出ることを防ぐため

魔物の討伐記録か冷孔の解放記録のどちらかが無いまま一ヶ月を過ぎると失効する

ヒーラーだけ職業の特性上少し毛色がちがうが……」

なるほど、色々考えてあるんだなあ。

しかし割引をしても結構な量の金貨を俺の武器の為にヴァイスは支払つてくれた。

これから稼ぐにしても気合入れてかねえとなあ……

「さて着いたぞ、次は防具だ」

俺たちは防具を扱う店に入店した。

金属や鉄の金氣のある匂い

それに皮や布、その他得体の知れない獸っぽい匂いもある。

日本の靴屋や服屋にも一種独特な匂いはあるがここまでダイレクトではない。

金属製の鎧や盾、皮製の鎧などは俺でも何とか分かるが

明らかに謎の生物由来の素材で出来た防具なども置いてある。

「これ、怪物の一部で作った防具か？」

海老や蟹のような甲殻類の殻のような物を材料に作られた鎧を指差して、ヴァイスに尋ねる。

胸鎧に使えるだけのこれだけのサイズの甲殻を持つ蟹を想像してちよつと俺はゾッとした。

「そうだな、だが今の所お前には縁がない。

只でさえ重い大剣を振り回しながら重装鎧を身につけて戦えないだろう？」

それもそうだ。

「お前が選ぶべきなのはこっちだ」

ヴァイスが指差したのは皮鎧の「一ナード」だつた。

「軽鎧を身につける前に鎧下を選ばなきやな……」

当然俺は鎧の選び方や良し悪しなど分からないのでヴァイスに任せることになる。

それから俺たちは随分と時間をかけて鎧を選んだ。

「鎧下の類……クロースアーマーやギャンベンも身につけずに鎧を直接着込むと擦り傷だらけになるぞ」

「町の中の傭兵とかバスターらしき人にはあまり気にしてなさそうな人も居たけど？」

町の中のそれっぽい人の中には、明らかに肌を露出した人も居た。

「中には機動性と動きやすさを重視して鎧着込まない奴も居るがな……」

怪物の種類によってはキツイ一撃を貰つたらそこで終わりって奴もいるからいつそ鎧を着ないというスタイルもあるにはある

だが素人の内から格好やルックスに気を使つてどうするんだよ。死ぬぞ？」

そういうことは一人前になつてから言つんだな」

もつともな意見だ。確かに半人前以下の段階で見た目を気にしている場合ではない。

「まあ、お前のスタイルだと大剣使いだからほぼ軽鎧一択だな……」

ヴァイスの意見を参考にしつつ俺は鎧や装備の試着を繰り返した。  
「フィット感や動きやすさが生死の境を分けるから気に入るまで慎重に選べ」

幾つもの籠手や肩パッドや膝パット、ギャンゾンやクロースアーマー

何着もある皮鎧をひたすら着ては動きを確かめ、脱ぐ作業。

「そういうえば魔力、とか魔法の掛かった鎧とかもあるのかな？」

気になったのでヴァイスに聞いてみることにした

「当たり前だろ？防護や軽量の術式が刻まれた服や鎧などの防具は当然存在する。

だがお前の先ずやるべき事は軽鎧をつけた状態での動きに慣れてからだ。

最初から魔法頼りにして基本の動きを疎かにして良い訳が無いだろ

「気になつたから聞いて見たんだ。はなから頼る気なんかねえよ」

「そのあたりはスターに慣れてから防具に不足を感じるなら自分で金を貯めて買うんだな」

「そうするよ」

再び防具の感触を確かめる作業に戻る。

しかし、防具を着け外しする作業といつのは思つていた以上に時間が掛かるもんだな。

何時間掛かつただろうか？

ようやく、一通りの防具を選び出す作業が終わった。

「まだきこちなく着慣れない感じはするが中々様になつてるじゃないか

「そうかな……？」

俺が今現在身につけているのは

体にフィットする黒く染められた皮製の全身ツナギ。

日本であつたライダースーツに良く似ていてデザインもそれほど悪くないよに思える。

そういうえばライダースーツはもしものとき擦過傷を防ぐため実用性

があることを思い出した。

その上から金属製の肩パット、肘パット、膝パット。

思っていた以上に動きを阻害しない。

籠手は皮と金属を合わせた物で手の甲の部分には金属板が張られている。

空手やスポーツで使うファウルカップに似た局部を覆う物も身につけている。

重要なことはわかるがちょっとそのままでは気になるところだつたが胴体部分を保護する黒の皮鎧がそれを目立たなくしてくれる。

鉢を打ち込まれて強化されており、色も黒く染められているので皮鎧なのに

そこまでデザインは悪くないよつに思える。

靴自体は日本で買ったスニーカーのままでヴァイスに問題ないといわれたのでこのままだ。

これだけでもなんだか十分強くなつたような気分にしてくれる。

「そこまでさせておいてなんだが、防具自体は決して過信するな。あくまで怪物との戦闘で受ける擦り傷程度の軽い攻撃のみ防いでくれるだけだ。

避けるのに徹しろ。そして大剣を使つた防御技術も覚えてもらひ。怪物のいい攻撃を貰つたら死ぬと思え」

今まで選んでいた時間を全否定するようなヴァイスのあんまりな発言に思わず突っ込んでしまう。

「それってつける意味あるのか?」

ヴァイスは出来の悪い生徒を見る教師のような眼で俺を見た。

「……お前もままじ」と程度とはいえ剣を振つていたなら心当たりはないか?」

小さな擦り傷や傷の痛みで集中を乱された経験は?」

うつ、心当たりがある。滅茶苦茶強い一撃を貰うと胴や籠手越しにも痛いんだよな。

今まで精神力で何とかしてきたつもりだつたが……

「何の為に俺が鎧を着込んでると思つてるんだ。

怪物との戦いで万全を期さなくて良い訳が無いだろ？

痛みを堪えるには集中力と精神力が居る。

まだ奴らと殺り合つてたことが無いからわからんだろうが僅かなこととはいえ無駄に精神力を失うのが怪物との戦いでどれだけ痛手になるか全然分かっていない。

防具をきちんとつければそんな些細な些細なことでも避けられる可能性が生まれる。

死に易い素人ならなおさら必要に決まつてゐるだろ？

戦闘の些細な事を疎かにする奴は何れ負けるし、怪物との戦いで負けは基本的に死だ

「……生意気言つてすいませんでした」

確かに、小さなことの積み重ねは大事だと俺も思う。

「分かれば良い。まあバスターの実情を知らないから仕方ない面もあるがな……

おいおい覚えていけばいいや

「はい……」

「ああ、あと何故俺が極力魔法抜きでお前を鍛えようとしているか分かるか？」

ヴァイスにそんなことを聞かれた。

ヴァイスに言われた事今まで聞いてきた事を総動員して考えてみると、そういえば冷孔の無い所では魔法を使うとき精神力と生命力を直に使うと言つていたな……

「魔法に頼るようになると油断が出来て不味いから？」

ヴァイスは少し頷くようにして続けた。

「それも勿論ある。だがそれだけでは正確じやない。

正確には前衛のバスターとして大成できなくなるからだ。

確かに魔法は便利だ。軽量化や強化が施された武器防具や補助魔法、攻撃魔法。

前衛でも魔法が使えるのに越したことは無くその恩恵は計り知れな

い。

だが……解放されていない冷孔の主と相対するときの勝手は随分違う

う

「なるほど……」

「閉ざされた冷孔の主と戦うとき

魔法を使うには生命力精神力を嫌でも消耗することになる。

俺たち前衛で武器を取つて戦う奴らは

魔法のあるなしに戦わねばならんのだ。

雪平、お前は使えるものを何でも使うといつ道を最初に覚えさせたくは無い。

魔法で強化した武具防具を身に纏い

町の周りで既に開かれた冷孔の補助を受けて比較的安全に地上をうろつく怪物だけを倒す……

そういう道もあるし大多数のバスターはそうする

「それで自分が強いと勘違いすると不味いってこと?」

「その通りだ。それで冷孔の主に挑んで無残に壊滅したり命を落としたバスターを幾つも俺は見てきた。

魔法が使えなくなつた時点で心が折れたり動搖を表に出すようでは前衛として話にならん

なんか眼に浮かぶようだわ。

使えるものを使って何が悪い!って感じで。

魔法や武器や防具の強さを自分の強さだと勘違いするとか周辺の怪物にラクに勝てるから生半可に自信着いちやつて……

自分だけは例外、つて思つて冷孔に特攻する様を……

そりやまあ、使えるものを使つことは悪いことじやないんだけどなんだろ?この違和感。

使えるものを使うことに対する危うさと言つかなんと言つか……

その危うさってどつつかで見たこと有るぞ。

「……使えるものは使つ、その事自体は構わないんだけど慣れないというよりは自分のものにしていない事が不味いのか?

教習所出たてのペーパードライバーが走り屋紛いの爆走するようなもんか。

そら事故るよなあ。

となるとあれか。最初から魔法頼りってのはオートマ車に乗つて町の中回るみたいなもんとそれじゃレーサーや走り屋にはなれねえ。素の自分のテクニックを磨かねえと。

魔法に頼り切るってそんな感じなのかなあ

「そのオートマ車とかペーパードライバーとか言うのは良く分からんが……」

ヴァイスが良く分からぬといった表情をしてくる。

あ、やべえ。俺には分かるかも知れないけど

こっちには自動車とかねえんだ。

そういうえばこっちに来てから馬車は有つても自動車は見かけなかつたなあ。

「ええと、車つてのは馬車とか乗り物とかそういう感じ」

この説明でいいのか？もつとちゃんと説明した方が良かつたのか？

「なるほど。そういうことならわかる。

「便利なものを知るのはきちんと基礎を身につけた後からいい、つてことだろ」

「そうだ。魔法の補助を受けないことは最初は辛いし勿論危険になるが……」

怪物の危険を肌で感じ取れるし最終的な地力が全く違うようになる。雪平、全てに慣れる。武器にも防具にもだ

これから一週間ほどで地上をうろついてる怪物との戦いで使い物になるようになる。

お前を鍛えていく。一週間後には魔法抜きで怪物を実際に一体狩つて貰うからな

「わかった、やって見せるぜ」

俺は躊躇い無くそう答えることができた。

辛いしキツイ道だが、それでこそやりがいがあるところなのだ。

## 第六話・修行、遙かに遠い故郷と風呂と音速剣

俺はヴァイスの指導の元、只管に修行と鍛錬に打ち込んだ。

皮鎧に身を慣らし、明けても暮れても大剣を振る日々。

「……腕の力だけで上手く振れる訳が無いだろうが」

「これじゃダメか?」

「それじゃ直ぐに手首を傷める。

もつと足の踏み込みから腰の捻り……

全身の力を使うんだ。

出来るまで今日はやつてもううからな

中々に難しい。

竹刀とはまるで勝手が違う。

これだけの超重武器を扱ったことは無いからな……

修行の時間は實際以上に長く感じられた。

しかし密度の濃い充実した時間だった。

「まずは縦に振ろうとするな。

扱いでからの縦の切り下ろしはその性質上溜めが出来て重さが乗せられるから威力も大きい分隙もできる。

まずは隙を最小限にすることから考えろ

縦の攻撃は自在に振り回せる臂力と技量がついてからでも遅くは無

い

「はいっ!」

この横振りの攻撃というのが難しい。

全身の力をフルに使わなくちゃならないから腕も足も酷い筋肉痛になつた。

それでも止める訳にも投げ出すわけにもいかない。

やると決めたんだ。

こんな所で止めたら何の為に始めたかも分からなくなる。

「剣を持ったままあの木まで可能な限り早く走れ。

剣先を地面に引きずるなよ」

なるほど、この訓練がどういうのを想定しているのかは良く分かる。  
剣を持ったままどれだけ速く敵に詰め寄れるかは大事だ。

構えを作つては構えを解く訓練もやつた。

これを可能な限り素早く行つ。

これは防御姿勢の訓練だと理解できる。

……分かつていたことだけやつぱり辛い。

肉体を酷使し苛め抜く過程、辛いものは辛い。

そういうえば元の世界の体育会系の部活動全般の事を思い出す。

こういう地味で基礎訓練が嫌で辞めて投げ出してしまった奴らもとても多いことに。

でもやっぱりそういうのを受け入れて何処まで自分で頑張れるかに  
よつて

何処まで伸びるかは決まってくると思う。

何処まで育つかも分からぬ、才能は未知数で頑張つても成果など  
上がらないかも知れない。

そういうことに努力という水を与えることの出来る

環境や意志の強さを持ち続ける事が出来る方が珍しいのだと俺も思  
う。

何処かの誰かが言つていたがやはり学校は箱庭なのかも知れない。  
俺たちは箱庭の中の小さな才能や優劣ばかりに眼が行つて

努力することの意味を何処かに見失つて忘れてしまいがちだ。

俺の今やつている鍛錬、努力、訓練、修行は

元居た世界でいう頑張りとは何かが違う、絶対に違う。

止めれば、緩めれば、死ぬ そういう類。

弱い心に流されて少しでも手を抜けば今此処で死ななくとも  
怪物と戦えば恐らく死ぬ。

情けも容赦も無い相手が本気で殺しに来ることが

そう遠くない未来に確定している……そういう類の剣の修行。

そう、現代では銃を使った戦い方が主だから

恐らくは戦国時代の武士やらがやつたのに近いと思つ。

今、俺は自らの生存を掛けて剣を振つてゐる……

「ああ、これがただの訓練だつたら……」

俺は叫んでいた。

心の底から今こそそう思う。

ヴァイスは何も言わない。

ただ黙つて俺が剣を振る所を見ている。

腕が完全に上がらなくなつた所でヴァイスがようやく口を開いた

「……少し体を休める」

その時は返事をする気力も無かつた。

呼吸が落ち着き、筋肉が溶けそうな疲労を抱えながらも俺は考えていた。

恐れないためにはどうすればいい？

死なないためにはどうすればいい？

ただ只管に、そう浮かぶ迷いを

現実の手法と具体的な行動に切り替えていかねばならない。

生き残る為に。生き残つて怪物を倒し、強くなつて冷孔を開いて元の世界に帰る為に。

勝利しなければ俺には真の安らぎは訪れない。

かといって手を休めれば心折れたまま妥協と偽りの人生が待つている。

それだけは……それだけは嫌だ。

例え死ぬことになろうとも耐えられない。

思考を必要なことに戻す。

必要以上の恐れは邪魔だ。

恐れて縮こまり、筋肉が萎縮すれば剣は振れまい。

恐れる心を黙らせて、集中すべきは相手の動きと自らの動きの把握。

恐れるくらいなら叫びでかき消す。自らを誤魔化そうとも。

俺自身の継続戦闘能力はどうだ？

元の世界の記憶を必死に掘り出す。

計算が苦手な俺でも、元の世界での最速レベルでの剣速は覚えている。

確か構えから打突まで0・1秒。

……戦闘中の5分、試合中の5分って無茶苦茶体感時間長いんだよなあ……

予備動作や駆け引きを無視すると

最低でも300秒戦い抜くには300回は振れるようにしておきた  
い、そんなことを昔考えたことを思い出す。

15分で大体900回……実際はそんなに数を振る事は恐らく無い  
が。

そういうえばそれに合わせて漫画やアニメ、ゲームで出てくる

音速剣とか剣から衝撃波とか出すのってどれくらいの速さが必要か  
も考えたことがある。

音速は340メートルを1秒で進む。

一振りの速度が0・0025秒で400メートルを一秒。

三十四倍の速度で動ければ音速剣が可能。

ブン……ブン……とかもつさり、という擬音表現が余りにぴったりな  
このクソ重い剣だと気の遠くなる遠さだ。

零一つの桁が余りに遠い遙かな領域。

遙かな領域だといって、目指していけない理由なんか無い。

……もしも魔法がこっちにあるなら、何時かやつて見せる。

遙かに遠い世界の故郷も、遙かに遠い剣も、目指して何が悪い！？

そういうことを考える余裕が出来ると  
ふと自らの体の臭いが少し気になつた。

「 そういうばこっちに来てから熱い風呂に入つてねえなあ……」

こっちのファンタジー異世界に来てから余りにも余裕が無さ過ぎた。  
宿では水場で体を流して「ゴワゴワ」した布で体を拭いていた。

元の世界で学校で練習が終わつたあと学校のシャワー室を借りて

そこボイラーが調子悪くて冷たいシャワーを浴びた気分に良く似  
てる。

我慢できないことは無いけどさ。

「ヴァイスさん、こっちの世界に熱い風呂はないの？」

「前から思っていたがちょっと贅沢な奴だなお前は。

熱い湯が張られた浴槽は設備が整ってる高級な宿屋とか

王侯貴族の贅沢品だぞ」

お前の装備とかで色々蓄えが心もない、とヴァイスが付け加えた。

「あー、こっちではそうなるのか……まあ我慢できないことはねえけどよ……

もう一個頑張る理由が出来たな……絶対に早い所風呂に入れるようになつてやる」

第六話・修行、遙かに遠い故郷と風呂と音速剣（後書き）

女つ氣の無れはやのひびきがんせんといかんなあ。

そして、一週間後の朝がやつて來た。

「おい、起きろ雪平」

「おう……」

「今日は町の外に出るぞ」

これが初陣か……緊張するぜ……

これから命がけの戦いが始まるかと思つと……

軽鎧を身につけ、大剣を持つて

ヴァイスに連れられ町の外に出る。

門番のおっさんに生きて帰つて来いよといわれた。不安をあおるような事を言わないでくれよ。

「この辺りの怪物の特徴は頭に入つているな?」

「スラだつけ?大丈夫だ」

命が掛かっているから必死にもなる。

「先ずは単体でうろついている怪物を探す」

程なく草原を這う怪物の姿が眼に入った。

一メートルくらいのダンゴムシに似ている。

赤くて硬そうな殻には凶悪な短い棘が生えている。

ヴァイスに聞いたスラという怪物の特徴と一致している。

「先ずは俺が手本を見せるから良く見ていろ」

声を落としてヴァイスは言い、剣を抜き放つと駆け出す。速い……そして軽やかに跳躍すると

殻と殻の継ぎ目を縫うように

ヴァイスの持つ黒い杭のような長剣が体重を乗せて怪物を貫く。鮮やかな奇襲だった。

スラと言つららしいダンゴムシの怪物は

ピン止めされた昆虫標本の用にもがいていたがやがて動かなくなり、殻だけを残して怪物の血肉は湿つた砂のよう

な物質にあつといふ間に変わつた。

— 奇襲で殺せるなら一番良い。怪物の動きに慣れるためにも

お前には動いている奴も相手してもらうが……

本来は無駄にダラダラと戦いに付き合つ必要も無いだろう」

ヴァイヌは手馳れた手つきで元怪物の殻と砂を搔き

「これが怪物の核だ」

「これが核なのか……」

これも事前に説明を受けたがこの結晶には魔力が封入されているら  
う。

使い道は多岐に渡り

バスターの討伐記録にもなるからきつちりと集めるよつに言われた。

「一番最初はサポートしてやるから怪物を狩つて見ろよ」

「適当な獲物を見つけて、俺が雷で動きを止める。即座に止め

通常が獣物を見つけてから俺が言つて重きを止めると、また単独でうろついているスラを探し……見つけた。以前の獣壁の結界を張るのは餘き

ヴァイスが魔法らしい魔法を使う所は初めて見る気がする。音も無く黒い長剣でスラを指し示すと

雷刃

ヴァイスは散文的、端的にそれだけ呴いた。

長々とした詠唱も大げさなジェスチャーも何もない。

即座に効果は現れ、一筋の雷光がヴァイスの剣の先端から迸る。

靈に打たれたスラが黒煙と焼ける臭いを漂わせ這いついていた動きを止める。

「やれやれ！」

魔法の効果に驚いている暇も無く、ヴァイスが合図した。

「ウチの母はお母さんのお母さんのお母さんのお母さん……」

俺は気合と共に駆け出し、怪物に肉薄する。  
スラバヤ街の盗賊二三人討伐

スラガ大剣の範囲に入った瞬間

大地を踏み込み得た力を腰から腕に伝えそして大剣を振るつ。

遠心力の乗つた大剣が怪物の殻に激突し……

恐ろしく硬い手ごたえを返す。反動で弾き飛ばされないよう踏ん張りさらに遠くへ大剣を振り切る感じをイメージして……

「つつしゃあ！」

怪物が折れた棘と斬られた傷口から体液を巻き散らしながら僅かに吹つ飛んだ。

明らかに深々と切り裂かれており……やがて動かなくなる。

こいつも先ほどと同じく殻の一部と核だけを残して湿つた砂になる。

「やつた……」

思わず深い安堵のため息が漏れた。

「……良くやつた」

「あざつす！ しかしこいつら本当に硬い……」

「次は一人で動いているスラを相手にしてもらつ」

今よりよほど危険だぞ。窮地に陥らない限り助けないから覚悟を決めておけ」

次は動いているこいつらか……まだまだ気が抜けなさそうだ。

ヴァイスのサポート付だが俺は初めて怪物を斬った。

一メートルはあるダンゴムシのような怪物、スラの核を拾つと  
今度は動いている奴らを倒すことになった。

怪物の動きに慣れる為に。

「分かつているとと思うが刃の角度と位置が悪いと切れずに剣が轡  
かかるだけだぞ」

「心配すんなって」

あいつ等は縦回転してくるらしい。

当てる剣先の位置が回転するスラの中心より下だと叩き斬れないだ  
ろ?。

再び町の外、魔物避けの結界の範囲を外れた草原をうろつく。  
単独で地面を這いずるスラを見つけると、俺はこちらに注意を引く  
ために小石を投げた。

「ほら、かかつて来いよ!」

そう挑発すると怪物の反応は劇的だった。  
丸まつてこちらの方に突進してくるのだ。  
坂も無いのにその勢いは強烈だ。

まるで自動車……しかも巨大なトラクターについているかの如きタイヤ  
だけが

こちらに外れて飛んでくるようだ。

しかもこのスラというダンゴムシに似た怪物の殻には凶悪な棘がつ  
いている。

その棘が地面を抉りながらこっちに来る。

あの速度の突進をまともに喰らえば大怪我をすることは間違いない。

恐怖を感じないといえば嘘になる。

だが、あいつの動きは直線的でこっちの体に体当たりしようと狙い  
をつけている。

それさえ分かれば……

「ここだあつ！！」

俺はスラの軌道変更が不可能なタイミングで体を左に倒しながら踏み込んだ。

俺の持つ大剣が体の動きと踏み込みに合わせて振られ……  
スラは俺の体がつい一秒前まで居た位置……

現在そこには遠心力を乗せて振られる俺の大剣の刃が待つ。交差攻法、クロスカウンター気味に俺の大剣と回転するスラが衝突した。

大剣の柄から伝わる強烈過ぎる衝撃に手を離さないように握り締めやがて硬質の殻を打ち破り肉を裂く手ごたえに変わる。

刃が真芯でスラの殻を捉えた瞬間

スラの中身の詰まつたタイヤのような構えは崩れ怪物の体がくの字にへし折れる。

へし折れただけでは相手の勢いも俺の大剣も止まらず、真つ二つに叩き斬った。

真つ二つに斬られた怪物がボスツ、ボスツ、と音を立てて地面に落下した音を俺は確かに聞いた。

「よつし！ 狙いはばつちりだぜ！」

「お見事」

ふう……

僅か一合、長い訓練に比べて余りに短い戦闘時間だ。  
でも実際はこんなもんなんだろう。

だが特訓のかいあつて初撃で決めることができてよかつた……

ダラダラと長引かせて良い事なんかない。

殺るか、やられるかだ。

本当の真剣勝負なんて初めてだつたからなあ。

やつぱりどつと疲れが来る。

倒したスラの残骸を見ると程近い所に核が転がっていた

怪物が落としたコアを拾い上げながら俺はヴァイスに尋ねた。

「なあ、ヴァイス、こいつらって本当に生き物なのか?」「どうしてそんなことを聞く?」

「なんとかその……気になつたんだよ

俺たちの世界じゃこんな死んで直ぐに砂に帰つちまつよつ生き物居ないし……でもやつぱり生き物なのか?」

「こいつ等は断じて血の通つ生命などではない……」

妙にきつぱりと大声でヴァイスは断言した。

しかも物凄い剣幕だ。

聞いているこつちが驚くくらいに。

なおもヴァイスは続けた。

「怪物と魔物の全ては邪神と魔人の作り出した狂つた玩具だ。人を喰い殺すだけに作り出された哀しくも唾棄すべきモノだ。絶対に止めさせねばならん。止めねばならぬ。

こんな不毛なことはな」

額に眉根を寄せ、ヴァイスがそういうのを俺は黙つて聞くしかなかつた。

「……こつちに来て見ろ、雪平」

ヴァイスの手招く方向へ近寄つてみるとある物があつた。

「うげ……」

ヴァイスに言われるがまま近寄るとそこには野ざらしの死体だ。

既に完全に白骨化しており割れた頭蓋骨や散乱した骨

それにこびり付いた赤茶けて変色した衣服の残骸らしき布……

鋸びた剣が一振り転がつている。

「恐らくはバスターになろうとして怪物に殺された食い詰め者の末路だな」

「こりやひでえや……」

ヴァイスがあんなに怒りを露にしたのもわかる気がする。

たとえ宗教がかつた理由だとしてもこれを許せないとこつるのは良く

分かる。

「怪物が居る限りこんな事は日常だ」

「なんとかしなきや、つてのは良く分かるぜ」

「なんまいだ、と咳いて俺は手を合わせた。

「成仏してくれよ……埋めてやらないか？」

「雪平には悪いが怪物が徘徊するこの草原でそれをする時間は……」

「それにもこのままにしどくのは……」

「それで下がろうとしたとき、異変は起きた。

「うわあああああああ……！」

悲鳴と怒号のような騒ぎ声がここまで聞こえてくる。

二百メートルくらい先の町に続く街道の方を見ると一台の馬車が疾走している。

その後ろを馬車と同じくらいのサイズの怪物が追いかけている！

鋭角的なフォルムと銀色の金属質の皮膚。

体格を支えるには細い四本の足。

何より目立つのはメスのような形をした巨大な一对の刃の触腕……

まるで金属で出来た巨大なカマキリに似た怪物……

良く見れば馬車の幌の一部は無残に切り裂かれている。

「馬車が襲われている……マリウスか……不味いな。

魔法耐性が高くて地上を徘徊する奴の中では強いほうだ」

「助けに行かないと不味いだろそれ……！」

「……先にいく……何れやりあつ相手だ、お前も来い。

だが間違つてもお前は奴の正面には立とうとするなよ

そういうてヴァイスは風のように走つていく。

「ちょっと待て！俺はこの剣あるしアニキみたいに身軽じやねえんだぞ！！」

大剣の重みがかなり辛いが俺は可能な限りの速度でヴァイスの跡を追つた。

## 第八話・急襲（後書き）

みうやくそろそろ女の子が出せそうだ……

## 第九話・天使

「はつ……はつ……」

俺は大剣を背負つて今までに怪物に襲われんとする馬車に近づこうとしていた。

馬車を引く馬が苦痛にいなないかと思うと地面にくづおれた。不味い。馬が足をやられた様だ。

このままでは馬車に乗っている人がやられ……

「疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ！風打！！！」

ヴァイスではない。凛とした女の子の声だ。

馬車から飛び出した女の子が怪物に向けて魔法を放つたのだ。飛び出した、といつのは比喩表現じゃなくて、文字通り飛んで出たのだ。

その女の子の背には一対の白い翼が生えていて。

そして、紋章のような刺繡が施されたゆつたりと長いローブを風にはためかせながら

杖を持つて空を飛んでいる。

「天使……？」

思わずそんな事を俺は呟いていた。

鋭角的な金属で出来たカマキリのような怪物マリウスは仰け反る様に後退し、一二、三回頭を振つたがそれ以上の損傷は受けていない。

「何でさつきから効いてないのよー！！」

翼持つ少女は手にもつ杖を振り回して空中から苛立つたように声を上げていた。

「雷刃」

散文的で一切の誇張もない冷たい声がポツリと草原に響く。一筋の雷光が怪物を包み込んだ。

「雷刃、雷刃、雷刃」

ヴァイスは一度、三度と繰り返して唱えていく。

その度に稻妻が空を割つて閃いた。

ヴァイスの魔法が怪物の足を止めている間に俺は何とか合流することができた。

「ぜーっ……はーっ……」

荒い呼吸を抑えようと努力する俺に、ヴァイスが非常に早口で声をかけた。

「そのままでいいから聞け雪平、マリウスには見ての通り魔法の効果が薄い。

足止め程度の役にしか立たない」

良く見れば、ヴァイスの雷はマリウスと呼ばれたデカイ金属製カマキリの化け物の表面を滑るように大部分が弾かれている。

弾かれた雷が空中に放電している。

「雪平、俺がマリウスの足を止めている間に後ろに回り込んで間接部を叩き折れ！！

鳥人族の娘は奴の直上真上から風打！！」

「あ、あんた達」

女の子の疑問を、ヴァイスが遮る。

「後にしろ、今は話している時間はない！！行け！！」

「わかつたぜ！！」

ヴァイスが雷の魔法を打ち込んでマリウスの動きを止める。

俺はその間に金属のカマキリの後ろに回りこんで……

「くたばれっ！！」

気合一線、思い切り後足の間接部目掛けて剣を横殴りに殴りつけた。金属の擦れる耳障りな音と共に俺の大剣が化け物の後足を捕らえた。折るまでは行かなかつたが怪物の後足の片方は

本来想定していない方向にへし曲がつた。

「今だ！雪平は離れる！」

ヴァイスが鋭い声で上空を飛ぶ女の子に合図する。

「了解——！疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ

！風打！！」

俺の頬を凄まじい風が撫つた。

眼に見える現象が無く、彼女のセリフから考へるとどうやら彼女の魔法は圧縮した空氣の砲弾のようなものを叩きつけるものらしい。

性物は後不足を破壊された所は上方から猛烈の破壊を食らひ落葉を崩して倒れた。

「雪平！同時に仕掛ける、縦斬りで胴を折れ！－」

渾身の力を込めて怪物の胴を、それすら超えて地面さえ叩き斬るつもりで俺は大剣を担いで振り下ろした。

マリウスの胴体部の半分以上に大剣が食い込む

ヴァイスのほうは怪物の頭部らしき所に剣を突き入れており……  
その自慢の鎌を振るうことなく怪物は一瞬ブルッと震えたかと思うと  
今までの怪物と同じように体組織の崩壊が始まり

湿つた赤茶けた砂を間接部から撒き散らしながら金属の外骨格だけを残した。

正直な話、魔法が足止め程度にしかならないこんな強そうな怪物を

殆ど何もさせないうちに倒すヴァイスの力量と指示の的確さには驚くばかりだ。

「やつぱア——キすげえな……」んな金属の塊みたいなカマキリの化

物に

上空からかけられた声の主の女の子が地上に降りてきた。

そういうのは翼の生えた女の子は何んだ？

俺にはまだまだ分からぬ事だらけだ。

## 第九話・天使（後書き）

やつと女の子が出せた……

## 第十話・鳥人族の娘

「あ～しんどかった……」

全くとんでもない初陣になつたと思う。

戦闘で慌しかつた為じつくりこの少女を見ている暇などなかつたから改めてこの翼の生えた少女を見てみた。

白い一対の翼が背中から生えている姿を見ると本当に天使にそつくりだ。

年の頃は俺と同年代くらいか？

白くて滑らかな肌、セミショートの金色の髪は外側に跳ね、パツチリした蒼い瞳。

かわいい、といつて差し支えないように思える。

「なんだか慌しくてろくに自己紹介もできなかつたわね。あたしはミルク」

快活に笑いながらミルクと名乗つた少女はそついた。

「ヴァイスだ」

「俺は桜田雪平」

「ヴァイスさんにサグラダ・ユキヒラね。

ユキヒラのほうは変わつた響きの名前ね、人間族で黒髪にダークブルウンの眼つてあんまり見ないし」

ちょっととなまつてゐるぞ、おい、でもまあいいか。

人間族つて事はこの世界にはミルクの他にも人の派生みたいな種族が居るのかな。

「さつきは指示に従つてくれて感謝する」

ヴァイスがミルクに礼を言った。

「あー。いいよいよ。初級魔法でも

詠唱を省略してあれだけガンガンぶつ放せる時点で

ヴァイスさん結構な実力者つてことだし……大丈夫？」

「この程度なら問題ない」

ヴァイスは事も無げに言った。

「続きは町に入つてからにするべ。

とりあえずあの馬車を何とかしないとな

「あ！ そうだ！！ 依頼者のおっちゃん大丈夫かな？」

ミルクが思い出したように言った。

「馬が足を痛めてたみたいだけど

もし馬が骨折とかしてたら俺らだけじゃ

馬車を何とかすることはきついんじゃないかとふと思つた。

「生きてればなんとかなるわよ。私回復魔法も使えるし」

ミルクがあつさりと言つた。

そういうえばこの世界回復魔法もあるんだよなあ……

「雪平、マリウスの核を拾つておくのも忘れるなよ」

「あいよー

三十分後、俺たちはタジンの町に帰り着いていた。

ミルクの回復魔法を見たが凄いもんだな。

蹲つて苦しげに嘶いていた馬が暫く淡い光に包まれて居たと思つと直ぐに動けるようになったのだから。

馬車の所有者の商人のおっさんには随分感謝された。

おずおずと謝礼の話を切り出す商人のおっさんには

依頼を受けていたわけでもないし勝手にやつたことだから必要ない」とヴァイスは断つた。

おっさんは随分感激していたように見えた。

戦つて腹も減つたしタジンの町の食堂で食事をすることになったのだが……

「助かつちやつたし食事代くらい奢らせてよ」

と、ミルクが言つたので彼女も着いて来る事になつた。

食事はやたらに歯ごたえのあるフランスパンと

こつちで言う鳥と野菜を煮込んだクリームシチューに似ていた。薄味だが腹が減つていたのでとても美味く感じる。

「悪いな奢つてもらつちやつて

「気にしないでいいよ。あの商人のおっちゃんから護衛代もらつて  
懐暖かいし」

「もぐもぐ……そういえばさ、気になつてたんだけど」

俺はシチューをかみ締めながらヴァイスに尋ねた。

「冷孔つてワープつーかテレポートつーか……

転移つてのが出来るんだろ？何で怪物がうろつく危険な外の道を使つて馬車を出すんだ？」

「あんたそんなこともしらないの？」

ミルクに思いつきり馬鹿にされたような顔をされる。

「雪平は大部分の記憶を失つて森で倒れてたんだ

世間一般の常識を忘れていても仕方有るまい」

ヴァイスがフォローを入れてくれるのが本当にありがたい。

「いや、そうなんだよ……情けない話なんだが

「あー、そうだつたんだ……ごめんね」

「いいよ、知らないのは事実だし」

「雪平の為に説明するが冷孔の転移とは決して万能ではない。

幾つかの術的、社会的制約が付いている」

「ふんふん」

「雪平も知つての通り冷孔の魔力は多岐に渡つて利用されている。町に怪物を寄せ付けないための防護結界、土壤の活性化、

それに普段の生活の炊事や産業に使用される魔力……

転移というのは転送する質量に比例して魔力を消費するからその魔力消費は多大なものになる。

町と町の徒歩移動が危険だからといって安易に転移を繰り返せばどうなる？」

「あー。分かつたぜ、町の結界とか他の部分に魔力を回せなくなるわな。

そりや確かに不味い

「その通り、冷孔から湧く魔力は何れ回復するとはい

貯蔵している部分を使い切つてしまえば結界は維持できない。

それに冷孔の転移には世界を巡る地脈の流れの【順路】が存在しどこでも好きなところへ、とは行かない

冷孔の転移が可能なのは大体一週間に一度くらいの頻度だ「各駅で乗り換える必要な電車みたいなもんか。

しかも待ち時間が一週間の……

ヴァイスの説明でようやく得心が行つた。

「そういう魔法関連の問題もあるんだけじせ」

ミルクは口を挟んだ。

「冷孔の転移って一部の人しか利用できない所があつてね」

冷孔転移の使用料つてたつかいのよ。物凄く

「さつき言つた冷孔転移の社会的制約だな」

「冷孔転移を使って一年かけて世界中を巡る大キャラバンや大商人とか

一部の貴族や王族、割引が使える高ランクバスターならともかく一般のちっちゃな規模の中小の商人は危険を犯してでも街道を行くしかないのよ

だからバスターを護衛に雇うのが成り立つのよ

世知辛い話だ。

「良く分かつたぜ」

「勿論町の外には怪物も溢れてるし、しかも怪物と戦うより人の商人を襲つたほうが

楽で手つ取り早いつて浅はかな考えを抱いた不心得者で不信心者でクソッタレの

ごろつきとかバスター崩れが野盗化して

怪物避けの結界を使って町の外で張つてる事もあるしね」

「ああ、そういう略奪者は斬つても罪にならんからな、覚えておけ

「お、おう……」

「捕まえて町に連れ帰つた所でどうせ奴らを待つのは縛り首だ」

「そういう野盗つて奴ら何考えてるかしらね。

目の前に人の敵、神の敵の怪物が今も町の外をうろついてるのに……

何で善き神はああいう奴らが生きるのを許しているのかしら」  
ヴァイスは事も無げに、ミルクは怒りを露にしてそう言った。

やはり価値観の違い、死と危険の近い世界であることを実感する。

怪物ならともかくやつぱり人を斬るというのは抵抗がある。

日本の法律に照らし合わせたところでそういう奴らはやつぱり死刑だろうし

襲い掛かられたら反撃した殺害した所で正当防衛が成立するだろう。  
「……なるようにならねえか」

その時は、その時だ。

此処は日本でもなければ甘ったれたぬるま湯の世界でもない。  
殺さず、などという理想が実現出来ないだろうという事は分かっている。

そんな神業を行える実力は、俺には今の所無い。

改めて俺は密かに覚悟を固めた。

その状況が訪れたらやるべきことは相手をかわいそつとか  
相手にも人生や友人があると思うことじやない。

そんなのは皆誰だつて一緒なのだ。

相手の殺意や洞喝に脅えて筋肉や体を縮こまらせることがじやない。  
そういう状況で出来ることなど知れてい  
体を動かし、正確に剣を振る。それだけ。

今の俺にはそれしか出来ない。

でもなあ、なるべくならそんなことは無いように願いたいぜ。

# 第十一話・異世界パラダイムの栄光の七柱神

シチューとパンを平らげかけたときミルクが口を開いた。

「そういえばさ、一人ってどの神を信仰してるの？」

「ええ? うーん……」

突然そんなことを聞かれても困る。

日本人は宗教観が薄いのだ。

クリスマスを祝つたり神社や寺に詣でたりもする。

確か家では仏壇があつたから仏教？

# 浄土真宗だつけなんだつけ……

「宗派の名前が出てこねえ……」

ミルクに盛大に驚かれた後嫌な顔をされる。

「忘れたのかミルク。雪平は記憶喪失なんだ

宗派の名前が出てこない、という事は

以前何かを信仰していたけど忘れてしまったということだろう。

ヴァイスのフォローが本当にありがたい

ヨーロッパの世界は非常に宗教の權威が強い世界らしい。

「おとこ」の「おとこ」

でも母の嫁先でして、二〇〇六年に一離婚して

邪神に呪へで也歎かひたるじやは一七月のち

アーヴィングの「モーリー物語」の一節

バヌタリが教義に囚われた者も邪教徒でもあるなどアモハ一か

本題に俺が邪神に呼ばれて、この世界に来たときの感想

正直言つて殺つたり。绝对に殺つてやつ。

「ベータ=0.75の初期状態で、 $\alpha$ を0.1から0.9まで

花の名前を冠する「」

ミレフバ驚異レニニラニハハ。

「そういうことになるな」

「怪物を倒さなきや見習いから脱出できないじゃん」

「ヴァイスと俺がこたえる。

「じゃあ何か人間族の魔法で体を強化してたとか……」

「いや、俺魔法自体がよくわからん」

「嘘でしょ……見習い加護なし魔法なし

それで怪物、しかも地上をうろつく怪物の中でも

結構強めなマリウスとの戦いに参加してたなんて……

自殺志願と変わらないというか無知って怖いっていうか……

ミルクが頭を抱えていたが俺にはいまいちピンと来ない。

「まあ、こいつは色々と変わったバスター見習いだな。

良ければ雪平に神の説明をしてやつてくれないか?

ヒーラーは神官もあるしな」

ヴァイスがそう頼むとミルクは心良く頷いた。

「了解、あんたの為に色々と教えてあげるわ。

この世界の栄光の七柱の善き神について」

「よろしく頼むよ。

邪神が怪物を作り出して、邪神が善き神に封印されたって話は  
ヴァイスから聞いたんだが

詳しい内訳は教えてもらえたかったから……」

「知つてたならもうちょっと詳しく教えてあげなさいよ」

ミルクがヴァイスをにらんだが相変わらずヴァイスのほうは涼しい  
顔。

「そのうちやううとは思つてたが

剣の振り方や怪物を倒す具体的手段やら何やらを教え込むので  
忙しかったからな……それに一辺に詰め込んだ所で雪平には多分覚  
えられん

「はあ……ヴァイスさん以外と酷い人ね」

「大本を外さなければ問題なかう」

「いや問題あるから。細かい不信心はこの際寛容に見逃すわ……」

ホン

いつたん咳払いをしてからミルクが切り出した。

「善き神、栄光の七柱神は邪神とその軍勢から全ての種族を守護し戦う力を貸してくれるありがた~い神様よ」

彼女の説明によると

人間族を守護する火と勇気の英雄神ファージーン

鬼人族を守護する雷と歡喜の鬼神サドヴァル

獣人族を守護する土と純粹の獣神アステルトリイ

鳥人族を守護する風と自由の鳥神フィアルヴェトレ

妖精族を守護する木と慈愛の精靈神リヤプラフィロト

竜人族を守護する水と知恵の竜神シェウォースタ

そして全ての神族を統べる光と正義の主神セイルミラシャ

この七柱の神が居るらしい。

「彼らが私達パラダイムに住む全ての種族を見守ってくれてるの」というかこの世界の名前を初めて聞いた気がするな。

パラダイム、か……

それにここタジンの町じゃ人間族……多種多様な眼や髪の色をした人を見たことは有つても

他の種族を見たのはミルクが初めてだつた気がする。

まあ、背中に羽の生えた鳥人族つてのが居るのなら

他にも異種族が居てもおかしくはないとは思つていたけど。

「具体的には加護つてのはどういうものなんだ?」

俺はミルクに尋ねてみた。

「神様たちに信仰と魔力を捧げることで

主に種族それぞれが持つ特性を高めてくれる奇跡をお授けになるわ

「永続の能力上昇魔法のようなものだ」

そういうふたヴァイスをじろりとミルクがにらんだ

「ヴァイスさん、神都でそれ言つたら異端審問官か神殿騎士団がすつ飛んでくるわよ

神の奇跡を人間の使う魔法と一緒にたにすることは何事か、つてね

「……以後気をつけよう」

ヴァイスは動いた様子も無くそういった。

「ヴァイスさんはどんな神を信仰してるの？」

私は鳥神フィアルヴェトレスの信者だけど

「……シェウォースタだ。一番性に合う」

「あー。確かに、知性と冷静さを統べるシェウォースタ信者っぽいなあ……」

他の種族の神を信奉してるのは珍しいけど

人間族が竜神族の神を信仰しちゃいけないなんて決まりはないし「

基本的には種族に付いた神を信仰するのが一般的というわけか。

「なるほどなあ……」

「雪平君もバスターを続けるつもりなら神の加護を受けたほうが絶対いいって

悪いこと言わないからさ。教会の神像に魔力を捧げて祈るだけだし大体必須みたいなものだし」

ミルクはそう勧めた。

「そろそろ使えるべきものを使つてもいいか……

基本的な動きは身についた頃だし

神の加護で底上げされた能力を自らの実力と思つて慢心することもあるまい

雪平、神を信仰するかどうかは任せせる、好きにしろ」

「わかつた、その内行つて見ることにするよ

そういえばヴァイス、このさつき倒したスラの核を

登録所みたいな所に持つてけばバスターに成れるんだよな。

小さすぎてダメとか無いよな？」

「登録所ではなくバスターズギルドだな、問題はないはずだ」

「魔法抜き加護抜きで連携してマリウスと戦える実力なら十分よ……

落ちたら誰がバスターになれるんだか……」

「じゃあ、速く行こうぜ……」

随分と掛かった気がするがようやくバスターになれそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5764z/>

---

オープンドシール

2011年12月27日22時49分発行